

後頭下開頭術後の離床を妨げる要因の分析 ～その他の開頭術との比較～

Barriers against stir up in postoperative patients with suboccipital craniotomy
-comparison top other craniotomies-

信州大学医学部附属病院 東5階病棟 中島彩子 原田美香 白井里佳 中村春香

黒河内みやび 横内とみ子 根井きぬ子

<要旨>

後頭下開頭術後患者は、他の開頭術後患者に比べて離床が遅い印象がある。後頭下開頭術後患者の離床を妨げる要因を明らかにするために症状の出現・経過・離床時期の実態を調査した。その結果 眩暈やふらつきが改善した日数と術後自立歩行までの日数が近似している事から、離床を妨げる要因は 眩暈とふらつきであることがわかった。

<キーワード> 離床の妨げ 眩暈 ふらつき

I. はじめに

後頭下開頭術後患者は、他の開頭術後患者に比べて離床が遅い印象がある。後頭下開頭術後患者は、特に眩暈、ふらつき、嘔気を訴えることが多く、これらの症状は患者の苦痛になるばかりでなく、術後の離床の大きな妨げとなっていると考えられた。

そこで、後頭下開頭術後患者の症状の出現・経過、離床時期の実態を調査し、離床を妨げる要因を明らかにするために今回の研究に取り組んだ。

II. 研究方法

1. 対象

2003年9月～2004年9月までに信州大学医学部附属病院東5階病棟（脳神経外科病棟）に入院し 後頭下開頭術を受けた患者27名、および他の開頭術を受けた患者24名。
下肢の麻痺・長期の髄液ドレーン留置・意識障害のある患者は除外した。

2. 調査方法

- 1) ①「術後尿留置カテーテルの留置日数」
②「術後トイレ自立歩行までの日数」

③「主な術後症状」

④「主な術後症状が改善した日数」

上記を入院看護記録より収集。③については出現率を調べた。

2) 後頭下開頭術を受けた患者をA群、他の開頭術を受けた患者をB群とし、A群とB群で①②

④についてはt検定、③の出現率については母比率の差をX²検定を用いて統計学的に比較した。

倫理的配慮として、記述内容で研究対象者を特定できない表現を用いた。

III. 結果

① 術後尿留置カテーテルの留置日数 A群 2.9日 B群 2.1日

両群に有意差なし。

② 術後トイレ自立歩行までの日数 A群 10.1日 B群 3.2日

両群に有意差あり。

③主な術後症状は、「眩暈」「ふらつき」「疼痛」「嘔気」であった。

症状の出現率は、A群 「眩暈」67% 「ふらつき」83% 「疼痛」83% 「嘔気」44%

B群 「眩暈」11% 「ふらつき」21% 「疼痛」68% 「嘔気」32%

「眩暈」(p<0.05)「ふらつき」(p<0.05)は有意差あり、「疼痛」「嘔気」は有意差なし(図1)。

④主な術後症状が改善に要した日数

A群 「眩暈」7.5日 「ふらつき」10.6日 「疼痛」7.8日 「嘔気」2.8日

B群 「眩暈」0.3日 「ふらつき」1.1日 「疼痛」1.9日 「嘔気」1.5日

「眩暈」(p<0.05)「ふらつき」(p<0.05)「疼痛」(p<0.05)で有意差あり。「嘔気」は有意差なし(図2)。

IV. 考察

A群とB群の尿留置カテーテル留置平均日数に差はなかった。しかし、トイレ自立歩行までの日数を比較すると、A群の方が有意に期間を要しており、離床を妨げる何らかの要因があると考えられた。

両群の症状出現率を比較すると、眩暈・ふらつきに有意差がみられた(図1)。疼痛はともに出現率は高いが有意差はなく、また鎮痛剤の使用などにより緩和されることが可能であることから、離床を妨げる直接的な要因とは考えにくい。

後頭下開頭術の対象となる疾患は、主に小脳腫瘍や聴神経腫瘍であり、手術時の小脳や前庭神経への侵襲により、術後眩暈やふらつきが出現することが多い。眩暈やふらつきが改善した日数と術後トイレ自立歩行までの日数が近似している事(図2)から、後頭下開頭術後の離床を妨げる主要因は、眩暈とふらつきであることがわかった。

図1

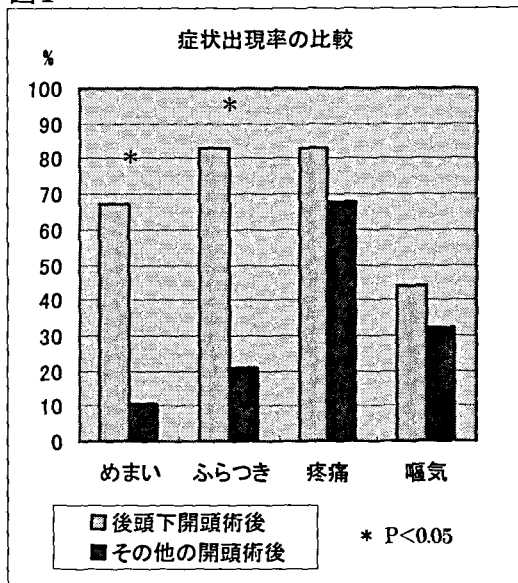
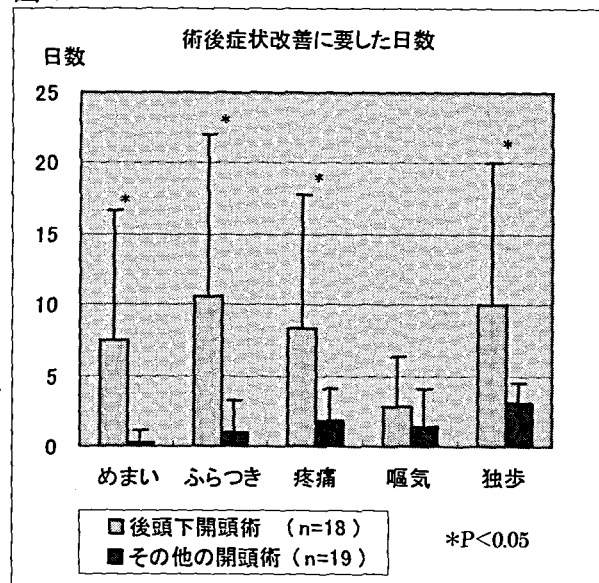


図2



*独歩はトイレ自立歩行とす

V. 今後の課題

今回の研究を通して、後頭下開頭術後の離床を妨げる要因と、症状が改善するまでの期間が明らかになった。今後、クリティカルパスの見直しを行うとともに、個々の事例を通して症状に応じた看護介入方法を検討していきたい。